地域政策学ジャーナル
2012，第１巻 第１号，97-112

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む（1）

阿部　　聖

Introduction to the Diary of Air-raid in Toyohashi area during the Pacific War written by Uzuhiko Toyota, part 1

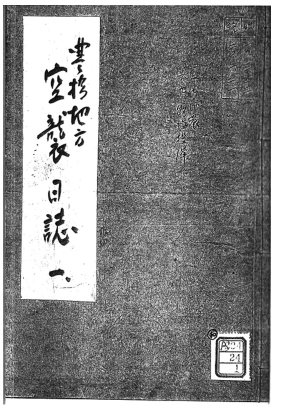
Sei Abe

要約：豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』（第一冊～第六冊）は，マリアナからのB29による本土空襲が開始された1944年11月から豊橋空襲により市の大部分が灰塵に帰した６月19／20日までの空襲の記録である。同日誌は，一市民の目を通して観察され記述された空襲の記録として，きわめて貴重なものといえよう。この日誌からは戦時期の豊橋の様子をもうかがい知ることができる。本稿では日誌をそのまま紹介するとともに，米軍資料およびこれまでの空襲研究の成果を利用しながら［解説］を付して，記述内容をできるだけわかりやすいものにした。

キーワード：豊橋，空襲，B29，マリアナ，第21爆撃機集団，第73航空団，作戦任務報告書

１．はじめに

ここに紹介するのは，豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』第一冊から第六冊[1]である。期間にして1944年11月23日から1945年６月20日までの約半年間である。空襲日誌がはじまった1944年12月23日は，米軍のＢ29写真偵察機（F13）がはじめて名古屋地区に姿を現した日であった。マリアナ諸島が米軍の手に落ちて以降，Ｂ29による本土爆撃は時間の問題とされていた。すでに11月１日以降，サイパン島からF13が連日のように本土に来襲していて，日本全体が緊張に包まれていた。ただし，



ほとんどの国民は日本の本土防空体制がB29の来襲に対してあまりにも無力であったことは知らされていなかった。そして，日誌が終了した1945年６月19～20日は中小都市空襲の一環として豊橋市街地が焼夷弾爆撃され，一夜にして灰塵と化した日であった。

豊田珍彦氏は，この間，来襲するＢ29について中部軍管区（のち東海軍管区）のラジオ放送等の情報と自宅のある豊橋市瓦町からＢ29を観察した様子を日誌に書き残した。そこからは，空襲下における市民の生活のようすも垣間見ることができて興味深い。日誌を一読してみて，すでに老境に達した同氏の戦い―Ｂ29の動向を「有のまま書き止めて」おくという戦い―にまず共感を覚えた。同時に，この日誌が浜松・豊橋地域の空襲史にとって重要な資料の一つであると判断した。そして，紹介する決め手となったのは，同日誌がこれまで内容にふさわしい分析や評価を受けてこなかった

1　豊田珍彦氏の日誌は，豊橋市中央図書館に所蔵されている。なお，本名は豊田伊三美，1928年から珍彦というペンネームを使用した。1949年には本名を珍比古に改めている。ただし，本稿では，日誌執筆当時のペンネームを使用する。

第１表：豊田珍比古略年表

1882年09月	三河国八名郡船着村（現新城町）に生まれる
1900年12月	陸軍砲兵工科学校入学
1902年09月	同校卒業。野戦砲兵第六連隊附を命ぜられ熊本へ赴任
1906年09月	兵役満期。帰郷（幡豆郡一色町）
1909年04月	老津村鈴木志なと結婚。豊橋市新銭町で所帯をもつ。11月渥美郡高師村に転居、雑貨商を営む
1912年08月	豊橋市船町の伊勢屋のあとを受け、薬種商を営む
1921年	豊橋郷土史友会結成、豊橋市市史編纂委員
1934年09月	豊橋市瓦町へ転居。店を閉める。以後執筆に専念。『古代の東三河』刊行
1935年08月	『東三河道中記』刊行
1937年01月	『東三河ところどころ』刊行。
1944年11月	23日「豊橋地方空襲日誌」の執筆開始（1945年6月20日まで）
1945年	『豊橋神社史』報告（神社整備調査）
1950年04月	三河郷土会会長
1951年06月	『三河百話』『和名鈔三河郡郷之研究』刊行
1954年	豊橋市制五十年史編纂委員長
1955年	藤ノ花女子高校理事
1957年	豊橋市史編纂委員長
1961年09月	『東三河郷士雑話』刊行
1962年09月	『尾張三遠地震小史』刊行

（出所）『自伝　五十年を語る』豊田珍比古翁二十五年祭記念、1989年、155～160頁より作成。

と思われることである。もちろん，一市民が空襲の様子を記述することの限界は指摘するまでもないし，不正確な点も多々ある。しかし，日誌の内容にはそれを上回る魅力があるといってよいだろう。

日誌の紹介に際しては，［解説］をつけて米軍や日本軍，両側の文献・資料を利用しつつ日誌の内容を補足した。結果的に長い［解説］になってしまったが，日誌の内容をより深く理解できるようにしたつもりである。なお，この日誌には氏が折にふれて読んだ短歌が掲載されているが，筆者はこの分野にまったく暗いため，割愛した。

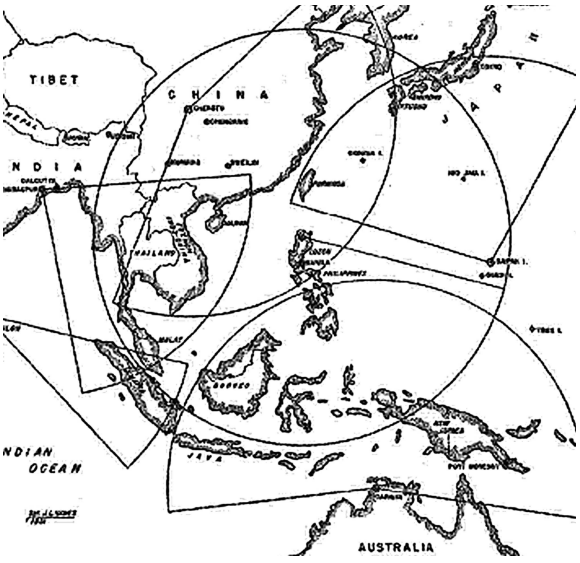
順番が逆になってしまったが，最後に，豊田珍彦氏について簡単に紹介しておく。氏は豊橋が生んだ郷土史家の一人である。『豊橋神社史』の執筆や『豊橋市史』の編纂委員長を務めたことで知られている。詳しくは第１表：豊田珍比古略年表を見ていただきたい。豊田氏は，1902年に陸軍砲兵工科学校を卒業後、熊本の野戦砲兵第六聯隊に赴任し，1906年に満期となるまで約５年間，軍隊生活を経験した。52歳の時，心機一転，薬種商の店をたたんで郷土史家の道を本格的に歩み始めた。

２.『豊橋地方空襲日誌　一』
（1944年11月23日～1945年１月11日）

はじめに
ことし十一月になつて九州方面は可なりの爆撃をうけた。それは支那大陸の基地から飛び出す敵だつた。
我南支軍がその基地である桂林、柳州を占領したのは中旬のことで、そのため敵は支那奥地へ後退を余儀なくされ我が本土爆撃に大きな手違となつた。
一方比島に於けるレイテの戦線は刻一刻と熾烈化して来た。そこで我が航空戦力の分散と補給源の破壊をねらつて新に手に入れたマリアナ諸島の基地から長駆我が本土爆撃の挙に出るだろうとはたれしも考へてゐた処だつた。
果然今日初めて我が地方上空に敵機の侵入を見た。即ち、日本向きと呼号するＢ29二機が高々度で侵入、伊勢湾岸を偵察の後、投弾もせずに脱去した。これを皮切として今後空襲は頻繁にあるものと覚悟せねばならぬ。挙国一致完璧の対空防備を以てこの醜敵と戦うのだと思ふと地沸き肉踊る思ひがする。以下次々にその戦ふ姿を有のまま書きとめて見やうと思ふ。おのが命ある限りに於て。
昭和十九年十一月二十三日
豊田珍彦　時年六十有三

［解説］1944年４月に実用配備されたＢ29[2]の最初の部隊である第58航空団が，マッターホルン作戦の一環として中国の前進基地群のある成都[3]から日本本土を初めて爆撃したのは，1944年６月14/15日のことである。第一目標は，八幡製鐵所であった。その後，同年10月10日には沖縄全域，10月25日に九州大村（海軍航空工廠），11月11日，同月21日にも大村などの目標を爆撃した。一連の爆撃は海軍航空工廠に少なからぬ被害を与えた。しかし，爆撃コストや爆撃部隊の損失面で無視できないものがあり成都からの爆撃は1945年１月初旬には作戦の中止を余儀なくされた[4]。

1944年７～８月にサイパン島，テニアン島，グアム島が陥落，サイパン島のアイズリー飛行場をかわきりにB29の飛行場建設が開始された。マリアナ諸島を基地にすることによって北海道と東北を除く日本本土の大半がB29の射程に入ることになった。第１図は基地から半径1600カイリ（約2960km）におよぶB29の行動範囲を示したものである[5]。同年10月22日，21爆撃機集団73航空団が同空港に配置され，訓練のための戦術爆撃を開始，11月24日から本土空襲（中島飛行機武蔵製作所）を開始した。これと並行してテニアン島，グア



第１図：B29の基地からの行動範囲

2　B29は初飛行1942年9月，参戦1944年6月で，全幅43.05m，全長31.05mの超重爆撃機，最大速度は高度7620mで581km/h，巡航速度370km/h，航続力は爆弾を7260kg搭載時で6120kmなどの性能をもっていた。搭乗員数11名であった（C.E. ルメイ・B. イェーン（1991）『超・空の要塞：B-29』渡辺洋二訳，朝日ソノラマ，279頁）。
3　第58航空団は本拠地をインドのカルカッタ西方のカラグプールに基地を建設，中国四川省の成都周辺を前進基地をとした。必要物資の補給はヒマラヤを超えて空輸した。成都等からのB29による爆撃については，とりあえずカール・バーガー『B29－日本本土の大爆撃』（中野五郎・加登川幸太郎訳）サンケイ新聞出版局，1971年参照。
4　インド基地からのアジアの日本関連施設への爆撃は３月まで行われた。
5　The USAF Historical Division of Research Studies（1953）, The Army Air Force in World War II, Vol. V., The Pacific : Matterhorn to Nagasaki, June 1944 to August 1945, The University of Chicago Press, Chicago, 5p.

第２表：1944年10～12月のサイパン島からのＢ29の出撃

月日	爆撃目標	月日	爆撃目標
10 月 27 日	ダブロン島潜水艦基地	11 月 29 日	東京工業地域
10 月 30 日	ダブロン島潜水艦基地	12 月　3 日	中島飛行機武蔵製作所
11 月　2 日	ダブロン島潜水艦基地	12 月　8 日	硫黄島の飛行場
11 月　5 日	硫黄島	12 月 13 日	三菱名古屋発動機製作所
11 月　8 日	硫黄島	12 月 18 日	三菱名古屋航空機製作所
11 月 11 日	ダブロン島潜水艦基地	12 月 22 日	三菱名古屋発動機製作所
11 月 24 日	中島飛行機武蔵製作所	12 月 24 日	硫黄島の飛行場
11 月 27 日	中島飛行機武蔵製作所	12 月 27 日	中島飛行機武蔵製作所

（出所）工藤洋三企画・制作（2009）『XXI Bomber Command Tactical Mission Reports Mission No. 1 to No.26』より作成。

ム島にも複数の飛行場が整備され，やがてB29の航空団が配備されることになる[6]。

また，11月１日からはB29の写真偵察機（F13）が連日のように日本本土へ向かい，爆撃目標の写真撮影や気象観測を開始している。名古屋地区の偵察は，11月８，12，13，21，22日に行われていたが，同地区が厚い雲に覆われるなどして偵察は不調に終わっていた。11月23日の偵察では名古屋地区は快晴で，名古屋全域および目標の写真撮影に成功した[7]。B29の名古屋地区への侵入はすでに情報としては確認されていたと思われるが，「今日初めて我が地方上空に敵機の侵入を見た」わけである。この衝撃が空襲日誌を書きはじめるきっかけとなったことは想像に難くない。

しかしF13は，実際には，11月５日に豊橋上空の写真偵察に成功していた。同日の写真偵察目標は東京，大田，横浜であったが雲のため撮影できず，太平洋沿岸を西へ進み静岡県内および愛知県東部の臨機の目標を撮影，伊良湖岬から洋上へ抜けた。この結果，陸軍老津飛行場，海軍豊橋飛行場，伊良湖岬が写真に納められた[8]。

(1) 十一月二十三日（木）[9]

午后０時半、突然警戒警報が鳴り出した。それッと準備にかゝると続いて空襲警報だ。昼間は隣保班長正副共不在なので組長として組内を一巡し準備完了を防衛本部に報告してくる。間もなく待避信号なので組内に伝達し敵機の監視に当る。どこをうろついて帰るのか附近に敵影なく三十分で空襲警報解除され警戒警報に入る。事故なしの伝令を出した。何分初めてなので少々緊張せざるを得なかつた。

来襲二機　　伊勢湾沿岸偵察　　脱去

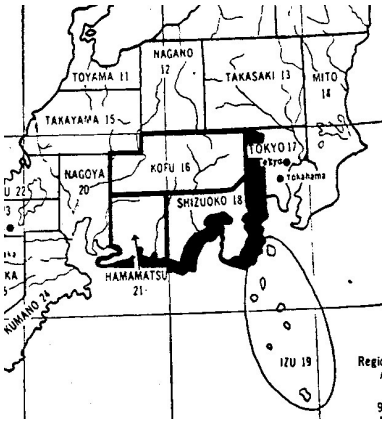
［解説］第２図は，中部地域のコード表である。豊橋と浜松を含む地域はHAMAMATSUとして21が割り振られた。日本のコードは90であったので，90.21と表記され，そのあとに目標番号が付いた。例えば，名古屋三菱航空機製作所には194という目標番号が付けられ

6　第73航空団以外の部隊は1949年12月に第313航空団がテニヤン北飛行場，1945年１月に第314航空団がグアム北飛行場に進出した。1945年３月には第58航空団がテニアン西飛行場に移動，さらに1945年４月には第315航空団がグアム西飛行場に進出した。

7　工藤洋三（2011）『米軍の写真偵察と日本空襲』，174頁。

8　工藤（2011年）32頁。

9（　）内の曜日は筆者が追加した。



第２図：日本本土コード表

ていたので，90.21-194となる。

隣保班（隣組）は1940年９月11日付の内務省訓令第17号「部落会町内会等整備要綱」にもとづき制度化された。同要綱によれば「市街地ニハ町内会ヲ組織スルコト」その下に「十戸内外ノ戸数ヨリ成ル隣保班（名称適宜）ヲ組織スルコト」が求められた[10]。隣保班は，現実的には動員・供出・配給・防空演習などを実施するための末端組織として組織されていった。空襲時には待避指示などの情報伝達の単位ともなった。

警報およびその解除の順序は，警戒警報―空襲警報（退避信号）―空襲警報解除―警戒警報解除である。こうしたB29の日本本土への接近の情報入手は，海上に電波警戒器を搭載した船舶や，硫黄島や八丈島のレーダーなどによってまず行われ，本土各制空部隊に連絡された[11]。また，日本各地の海岸線や要地に設置された監視哨（レーダーおよび目視）も重要な役割を果たした[12]。

なお，日誌の日付の前に付いている（1）は，日誌を開始して第１回目のＢ29の来襲という意味である。□内の「来襲二機　伊勢湾沿岸偵察　脱去」は中部軍管区のラジオ情報と考えられる。ただし，これら日本側が発表した数字を確かめるための客観的資料は少ない[13]。

（2）十一月二十四日（金）

十二時近く昼食を終つた直後、警戒警報に続いて空襲警報だ。情報によると敵は十機編隊で伊勢湾に侵入し針路を東にとり東部管内に行つたらしい。従てこの地区に被害なく午后三時空襲警報も続いて警戒警報も解除になつた。今日も男子は組で私一人なので絶へず組内を巡つて監視に当り前後の伝令も自ら努めた。

来襲七十機　東部にて十四機撃墜破

［解説］11月24日，サイパンのアイズリー飛行場を飛び立った第73航空団の111機のB29が，500ポンド一般目的弾（M64）10発と焼夷弾（M76）３発を搭載して，第１目標中島飛行機武蔵製作所，第２目標を東京市街地および港湾として出撃し，これらを爆撃した。予定飛行ルートはＡとＢの２種類が用意された。Ａルートは，遠州灘・駿河湾から上陸し，富士山を攻撃始点（IP）として第１目標の中島飛行機武蔵製作所へ向い，これを爆撃して，房総半島（九十九里浜附近）から離岸するものであった。Ｂルートは，房総沖から上陸し大網飛行場（35°28’N・140°25’E）をIPと

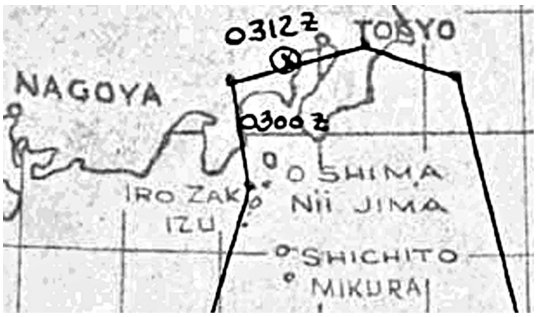
10　内務省地方局行政課（1940）『地方行政連絡会議』（国立公文書館デジタルアーカイブス）。

11　原田良次（1973）『日本大空襲（上）』中公新書，34頁。氏は、太平洋戦争末期，松戸基地でB29邀撃夜間戦闘隊の一整備兵として過ごした。文庫本の余白に空襲日記をつづり，戦後，日米の資料を照合しつつ『日本大空襲』にまとめあげた。

12　地域の監視体制については，とりあえず高橋国治「防空監視隊副隊長として」（浜松の空襲・戦災を記録する会（1973）『浜松大空襲』）132～133頁参照。

13　空襲被害や本土防空戦についての大本営をはじめとする各種発表が，実際の被害や戦果とかけ離れたものであったことについてはよく知られている。その実態については，中日新聞政治部で外務省，内務省，防空総本部詰めの記者として取材にあたっていた水谷鋼一氏が戦後27目に公表した取材メモがある。とりあえず，これを紹介した中日新聞社（1973）『本土空襲記録　水谷メモから（昭和47年８月11日～30日）』（江口圭一寄贈資料，愛知大学豊橋図書館蔵）を参照されたい。

14　米軍側の資料として Headquarter of XXI Bomber Command, Tactical Mission Report, Mission No.7（以下，Tactical Mission Report は「作戦任務報告書」と記す）をおもに利用している。第３図以下の飛行ルート図も同様である。なお，初期の爆撃ルートを検証したものとして，同資料を利用した拙稿（2009）「初期本土空襲と浜松」『空襲通信』第11号，空襲・戦災を記録する全国連絡会議，同（2010）「浜松空襲に関する米軍資料『作戦任務報告書』― 1944年11月・12月の浜松空襲」『遠江』33号，浜松史蹟調査顕彰会がある。



第３図：1944年11月24日の飛行ルート

して中島飛行機武蔵製作所へ向い，これを爆撃して相模湾から離岸するものであった。しかし偏西風のため，出撃予定部隊すべてがＡルートを飛行することになった[14]。一部の部隊は日誌にもあるように大きく西にそれたものもあった。初冬の日本上空にはジェット気流として知られる強い西風が吹いていて，偏流（航空機が気流に流されること）の修正は困難を伴った。爆撃航程（IP ―目標）は追い風か向かい風で計画する必要があった。しかし，向かい風の場合は対地速度が遅くなり対空砲火の危険が増し，追い風の場合は対地速度が速くなり爆撃の技術的困難さが増大した[15]。

第３図は，報告された一部の部隊の飛行ルートである。地図中の0312Zはグリニッジ標準時で，３時12分を表す。日本時間に直すにはこれに９時間をプラスする。日本時間は12時12分ということになる。日誌の「十二時近く昼食を終つた直後，警戒警報に続いて空襲警報だ」という記述は，大きく西にそれた部隊に対するものと思われるが，時間的に符合している。

米軍側の発表では，10分の２～９の雲のためこの日第１目標に投弾したB29はわずか24機，第２目標は58機であった。またこの日，125機の日本機が出動し，B29の火砲により撃墜５，同不確実18，撃破９を出した。米の損失機は２，死者１名・行方不明11名という結果であった[16]。

原田良次（1973）によれば，「日本の陸軍制空部隊は，この一〇，〇〇〇メートルの高度で来襲したB29に，一部の技量優秀の小数機がようやく敵と同高位をとって攻撃したが，いずれも効果は少なかった。また海軍厚木基地の発進もおくれて成果はなかった」という。高射砲の性能も最大射高9000メートル，有効射高6000メートルと全く不十分であった[17]。

(3) 十一月廿七日（月）

正午少し過ぎ又々警戒警報なので組を一巡し準備完了ですと防衛本部に報告。帰途空襲警報を聞いて組内へ伝達。近くの神明社を案じて此の間にお参りすると一人の警護するものもない。即ち通りの佐藤弥平氏へ至急手配する様頼んで帰ると、避難信号なので組内に伝達した情報では敵は浜名湖西方を猛爆中だといふ。時折無気味な地響が伝はつてくるので自分も半は退避壕に入る。二時に近く空襲警報が解除され、次いで警戒警報も解除されたので無事故の伝令を出して平常に帰つた。

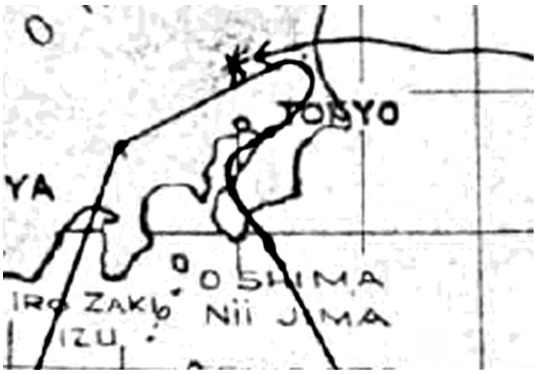
来襲四十機　　神戸村地方猛爆さる

［解説］この日の爆撃は，第１目標は中島飛行機武蔵製作所，第２目標は東京市街地および港湾であった。B29は，それぞれ500ポンド焼夷弾（M-76）３発と500ポンド一般目的弾（M64）７発を搭載した。飛行ルートは，Ａルートが選択された。11月24日の爆撃のやり直しとみられる。爆撃部隊は，駿河湾または相模湾から上陸して目標に向ったが，一部の部隊は人為的ミスにより西へ大きくそれ，室戸岬から上陸，IP へ向った。大阪，浜松（実際は渥美半島）への爆撃はこの群団の航空機と考えられる。81機が出撃したが，19機が機械

15　奥住喜重（2006）『B-29　64都市を焼く』揺籃社，17頁。

16　「作戦任務報告書」No.7. 日本側の発表は，防衛庁防衛研修所戦史室（1968）『本土防空作戦』朝雲新聞社によれば，来襲機数七十機，撃墜五（内体当たり１）となっている。以下，引用に際しては戦史室（1968）と略す。

17　原田良次（1973）63頁および50頁。



第４図：1944年11月27日の飛行ルート

第５図：1944年11月30日の飛行ルート

第3表：1944年11～12月の本土空襲（第73航空団）

年月日	第1目標	第2目標	目標上空の天候	第1目標投弾機	第2目標投弾機	その他有効機	損失機	死者・（）内不明者数
11.24	中島武蔵製作所	東京の港湾・市街地	2-9/10	24/111	58	6	2	1(11)
11.27	中島武蔵製作所	東京の港湾・工業地域	10/10	0/81	50	12	1	(12)
11.29	東京工業地域	なし	10/10	23/29		2	1	(12)
12. 3	中島武蔵製作所	東京の港湾・工業地域	良好	59/86	8	7	5	(46)
12.13	三菱名古屋発動機	名古屋市市街地	3/10	71/90	2	7	4	2(34)
12.18	三菱名古屋航空機	なし	5/10	63/89		10	4	(33)
12.22	三菱名古屋発動機	なし	6-10/10	48/78		14	2	(17)
12.27	中島武蔵製作所	東京の港湾・市街地	2/10	39/72	6	7	3	8(19)

（資料）前掲，工藤洋三企画・制作（2009）より作成。

の故障と人為的ミスのため早期に帰投した。10分の10という雲量のため目標地域（第２目標）に到達したのは50機で，雲上からレーダー爆撃を行った。日本の戦闘機による攻撃，対空砲火はなかった。なお，米軍の損失は１機，行方不明12名であった[18]。第４図は一部の飛行ルートを示す。矢印と※印は，ルートには関係なく，日本側レーダー波の位置を示す。

米軍の発表によれば12機が臨機目標である浜松，静岡，沼津および大阪を爆撃した。完全に地上を覆った雲の上からの爆撃であったとされる。ただし，浜松市には爆撃記録がない。これは「着弾データ」に「浜松西の半島」とあるにもかかわらず，最終的な報告書に「浜松」と誤記されたことによる。『田原町史（下）』（571頁）によれば，この日投弾されたのは伊良湖地区（神戸村附近）であった[19]。同地に投下されたのは一般目的弾（GP）21発・６トン，焼夷弾（IB）13発・４トンであった。

(4) 十一月三十日（木）

午前一時少し過ぎ然も小雨降る中に敵機来襲で警戒警報が鳴る。糞ツと飛び起きて待機したが敵影なく三十分許りで解除になつた。

18 「作戦任務報告書」No.8. なお，日本の出動機は雲層を突破することができず，高射砲も射撃できなかった（戦史室（1968）415頁）。
19 豊橋市（1987）『豊橋市史（第四巻）』279頁は，『中部日本新聞』昭和19年11月28日付）に拠りつつ「多くは桑園，甘薯等の畑に落下したが，民家にも多少の被害があった」と記している。

(5) 午后二時半又々警戒警報だ。組内を見巡り準備完了の伝令を出す。何でもこの地方に侵入した敵一機投弾もせずに退去したらしい。三十分許りで解除になつた。

来襲二十機　駿遠及帝都爆撃脱去

［解説］11月30日の爆撃は，第１目標を東京の工業地帯とした初の夜間空襲であった。第２目標は指定されなかった。飛行ルートはＢが指定された。出撃機数は29機で，各機は，420ポンド集束破砕弾（T4E ４）３発と350ポンド集束焼夷弾（M18）17発を搭載した。破砕弾と焼夷弾の組合せはこの日が初めてであった。なお，一部の部隊は，実際には，復路は相模湾ではなく伊豆半島の先端から洋上に抜けるルートをとった（第５図）。目標上空に達した時間は291454Zから291647Zとなっているので，日本時間では29日23時54分から30日01時47分ということになる。

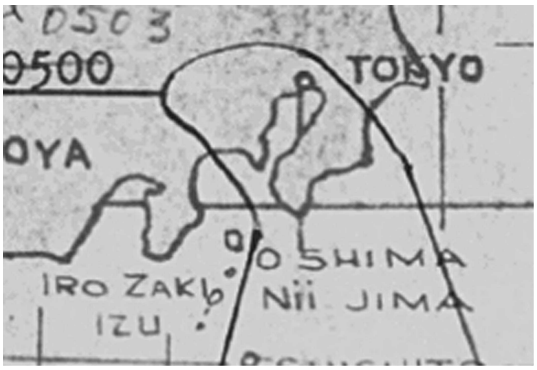
29機のうち第１目標を攻撃したのは23機で主にレーダー爆撃を行った。米軍資料によれば敵機の反撃は１機の未確認機によるものだけであった。対空砲火も激しいが貧弱で不正確と報告された。また出撃したB29のうち１機が行方不明，１機が友軍機の射撃により損害を受けた[20]。

(6) 十二月三日（日）

午后二時少し過ぎ高らかに警戒警報が鳴る。組を一巡して自ら準備完了を本部に報告してくる。三十分後に空襲警報。敵は静岡県下に侵入した模様でこの辺りに敵影なく、約一時間で空襲警報解除となつたので無事故の伝令を出した。

来襲約七十機帝都及東部にて撃墜二十一機

［解説］12月3日，第１目標を中島飛行機武蔵製作所，第２目標を東京の工業地帯および港湾をとして，86機が出撃した。飛行ルートは



第６図：1944年12月３日の飛行ルート

Ａコースであった。また，各B29は500ポンド一般目的団（M64）７発，焼夷弾（M76）３発を搭載した。最初の部隊が030511Z（日本時間３日14時51分）にIP（富士山）に到着，最後の部隊が到着したのは030623Z（３日15時23分）であった。

第６図の0500は目標到達時間0500Zと考えると，日本時間で14時を示す。0503は爆撃開始時間である。なお，目標上空までの途中で高速の風160ノット（約290キロメートル／時）に遭遇し，近い西風のためIPの東へ流された。

日本軍機の反撃は125機により523回，この攻撃によりB29，１機が失われ，あと１機が復路の飛行中に不時着水した。また３機が行方不明となった。人的損害は46名に上った[21]。

(7) 十二月十日（日）

五六日間（ま）あると思ふやさき午后一時少しすぎ警戒警報が鳴り出した。班長在宅なので組を任せ準備完了を本部に報告してくる。三十分許り緊張して待機したが敵影なく解除された。

［解説］工藤（2011）によれば，12月10日にF13は名古屋地区で「写真偵察とレーダースコープ写真を撮影。名古屋は雲のため撮影できず，東南海地震直後の尾鷲の津波災害を撮

20 「作戦任務報告書」No.9.
21 「作戦任務報告書」No.10.

影」した。日誌の「午后一時少しすぎ」の警戒警報がこのF13に対するものかどうか推測してみよう。旧豊西村（現在の浜松市豊西町）警防団第四分団の空襲記録によれば，同地域同日の警戒警報発令は１時23分，同解除が２時15分となっている。同資料からは午前か午後かは明確ではないが，距離の近い豊橋と浜松でほぼ同時刻に警戒警報が発令されたことは十分あり得る。ちなみに，津の空襲を記録する会によれば，13時16分警戒警報発令，13時38分同解除となっている[22]。

戦史室（1968）『本土防空作戦』（421頁）は，同日19時25分に関東地方に警戒警報発令，20時06分空襲警報発令と，敵小数機の侵入を伝え，その後侵入機は20時40分，焼夷弾を投下して南方に退去したとしている。

総合的にみて，「尾鷲の津波災害を撮影」できるのは昼と考えられるので，豊田氏が聞いた警戒警報は名古屋地域偵察のF13に対するものと考えられる。

（地震）十二月七日午后二時
机に向つて調べものをしてゐると、地鳴りがして地震だ。大したものでもあるまいとは思つたが、それでも戸外に出た。それが益々強くなつて一時は立てゐてもよろける位い。我が家はと顧みると丸で大波にゆられる船のようだ。家財器物の散乱する物音は女子供の悲鳴に交つてさながらの修羅場だ。約十分位ゆれて納まつた。屋内に入つて見ると散乱した器物と崩れ落ちた壁土とで足の踏み場もない。早速組を一巡した所どことて多少被害のない家はなく、殊に杉本･中村両君の家がひどくやられて居る。然し火の粗忽もなく、怪我人も全くなかつた。この旨を直ちに町内会長に報告し、帰つて婆さんと後片附にかゝり、晩迄にどうやら一通り片附けた。
損害としては納戸境のマライ戸二本が折れたのと、硝子が入口で四枚破れた外、戸障子の大部分が動かなくなり、壁といふ壁は悉く無数の亀裂。この方の損害は余程の高に上るだろう。家に危険状態はなく、屋根瓦も落ちず。書棚は悉く後方の梁にとぢつけてあつたので転覆を免れ、内部の硝子戸は空襲に供え全部取りはづしてあり、箪笥など倒れた家が相当あつたのに幸にして無事だつた。
この地震は今まで出合つたことのない程強烈なもので、彼の子供の自分に会つた濃尾の大震よりも遥かに強かつたと思ふ。たゞあの時は山間の郷里にゐたので大したことはなかつた。今度はこの附近でも倒壊家屋がそこここにあるらしい。マアこの程度の損害ならよかつた方だ。それにしてもこの戦争最中に地震とは天の試練の並々ならぬを思はせる。

［解説］東南海地震は，正確には1944年12月７日午後１時36分に発生した。震源地は，地震発生直後は遠州灘といわれていたが，和歌山県新宮市付近で，地震の規模はマグニチュード7.9であった。愛知県南部の震度６～７で，

第７図：1944年12月10日のF13による航空写真（旧尾鷲町）

22　津の空襲を記録する会（1968）『三重の空襲時刻表』（江口圭一氏寄贈資料），愛知大学豊橋図書館蔵。

津波による被害が三重県の海岸に集中した。東南海地震の死者は1223人に達し，うち愛知県は438人に上った。第７図は，F13が12月10日に撮影した津波から３日目の旧尾鷲町の写真の拡大図（北川河口）である[23]。海岸線が津波により何もなくなっている様子が伺える。川の両側の小さな黒い点は船だという。なお，飯田汲事氏の研究によれば[24]，豊橋市の被害は，全壊が総戸数28415戸のうちの115戸，半壊338戸，死者５人，負傷者38人で他地域に比べると被害は比較的少なかった。

(8) 十二月十二日［十三日（水）］
午前一時警戒警報に続いて空襲警報が発令された。情報によると少数の敵機が東海地方に侵入したらしい。正副班長在宅なので一切をお任せして待機したが事故なく三十分許りで解除となつた。
(9) 午前六時又々警戒警報が鳴る。又かと許り緊張待機したが敵影も見ず、約三十分で解除。
(10) 午后一時少し過ぎ突然警戒警報に組を一巡して準備完了。本部に報告してくる間もなく空襲警報が出た。敵は名古屋を目標に本腰で来たらしい。副班長が任務に就たのでそれに譲り壕にもぐる。遠く近く爆音が聞へる。敵のやうにもあれば味方のやうにもある。そのうち高射砲がうなり出した。一寸静かになつたので壕を出て見ると、加藤君から敵数十機が北方を西に向つたときいた。三時少し過ぎ、本宮山の方に数機の一隊と頭の真上に五機一隊の敵を見る。真白な巨体を憎らしい程高々度で飛んでけつかる。高射砲がまた鳴り出した。次に出て見たとき、敵の六機編隊が飛行雲を曳いて南方に逃げる姿がはつきりと見える。女子供を呼んで見せてやる。四時少し過ぎになつて空襲警報が、少し間を置いて警戒警報が解除となる。敵は名古屋に焼夷弾をバラ撒いたらしい。ラジオは夜になると敵に目標を与えるから早く火事

第８図：1944年12月13日の飛行ルート

を叩き消せと叫んで居る。どうか損害を最小限度に喰止めたいものだ。
(11) 午后七時又々警戒警報だ。昼間のあの憎らしい敵機を眼のあたり見たので燈火は空襲時以上の厳重管制。世はたゞ黒一色に包まれて仕舞つた。警戒を正副班長にお任せして、まゝよ空襲までと床に入る。どうやら空襲もうけず九時二十分になつて解除、防空服装のまゝ朝までごろ寝。

来襲八十機　　撃墜破十機

［解説］日付に「十二月十二日」とあるのは，12月13日の間違いであろう。この日は名古屋地域が初めて爆撃目標となった日である。日誌は「敵は名古屋を目標に本腰で来たらしい」と記している。第１目標は三菱重工名古屋発動機製作所，第２目標は名古屋市街地であっ

第９図：1944年12月13日の爆撃写真

23　中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1944 東南海・1945 三河地震報告書』平成19年３月。写真は同報告書29頁より引用。写真の説明には12月12日午後０時から１時に撮影したものとあるが，12月10日の誤りであろう。写真は国土地理院などの研究グループが米国の国立公文書館から入手したもの。
24　飯田汲事『東海地方地震津波災害誌』飯田汲事教授論文選集発行会，昭和60年11月，466頁。ただし，引用先は，http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/mikawa/mikawa /siryo.top.html より。

た。出撃したのは４群団，90機で，各群団１戦隊が集束焼夷弾（M18）を搭載するよう指令された他は500ポンド一般目的弾（M64）10発を搭載した。15機は機械故障のため早期帰投した。指示されたルートは，浜名湖から上陸，35°14'N・137°22'E（足助付近）をIPとして目標へ向うものであった。報告書によると，実際には御前崎付近から上陸してIPへ向い，爆撃後は左旋回して三河湾，渥美半島を通過して太平洋上へ抜けた。71機が130457Z～130638Z（日本時間で13日13時57分～15時38分）に第１目標に爆弾を投下した。

第９図は，爆撃を受けている名古屋三菱重工発動機製作所（大幸工場）[25]。第１目標には，GPの16%（49発）が照準点の1000フィート（約305メートル）以内に命中した。１機が浜松に焼夷弾15発３トンを投下した。日本の戦闘機の攻撃は，約百機により106回。爆撃航程および目標上空の対空砲火は激烈かつ正確なものであった。B29の損失は，対空砲火によるもの１機，理由不明の不時着水１機，行方不明１機，燃料不足１機の計４機で，人的損失は死亡１人，行方不明34人であった[26]。日誌中に「高射砲がうなりだした」とあるが，この高射砲がどこのものかは不明である。近い所では旧御津町の大恩寺山，豊川市川花町の豊川砲台，旧二川町などにあった[27]。

なお，工藤洋三（2011）によれば，この日出撃したF13は、B29の名古屋空襲をレーダー妨害で支援するとともに東京地域の写真偵察を行った。

（12）十二月十五日（金）

暁闇の空に警戒警報が鳴り出した。又かと退避準備にかゝると続いて空襲警報だ。この間僅かに五分間、遠く近く退避信号が鳴り出したので壕にもぐる。飛行機の爆音も高射砲の炸裂音も聞へず静かな夜だ。正副班長が時々巡つて来て連絡してくれる。四時に発令されたのが五時四十分になつて解除されたが、壕の中は骨をさすやうな寒さだつた。

（13）午前十時又しても警戒警報。正副班長不在故組を一巡し本部に準備完了を報告して来る。情報では敵は浜松地方に来たらしいがこの辺り敵を見ず。十一時少し過ぎ解除。

来襲一機　　県下を偵察　脱去

［解説］12月15日はサイパンからの爆撃作戦はなく，F13の偵察作戦も記録されていない。ただ，工藤洋三（2011）の「写真偵察機F13の作戦一覧表」には，12月13日の作戦任務４M37AおよびBの後，12月20日の４M46までの間，すなわち4M38～4M45までの作戦任務番号が欠落している[28]。これはこの間の原資料が現在のところ見つかっていないことを示すと思われる。こうした理由から，この日のB29はF13である可能性が強い。旧豊西村の空襲記録によれば，午前３時15分に警戒警報が，さらに同４時８分に空襲警報が発令された。「名古屋方面に入るなれば四時四十五分頃、三機分かれて侵入」という記載がある。空襲警報解除５時38分，警戒警報解除５時46分であった。また，松戸基地の原田良次は「○二五五より警戒警報となる。・・・来襲機B29五機なり。○五一五で空襲警報解除。東京の海よりの寒空が今日も燃えた。江戸川とのことなり[29]」と記している。偵察機は場合によっては投弾をした。

（14）十二月十七日（日）

午後九時もう寝てゐた処へ警戒警報だ。十分後には空襲警報が出る。敵か味方か頭の上を横切つてゆく一機に退避信号が出て何れも壕にもぐる。そ

25 「作戦任務報告書」No.12.
26 同上。
27 大田幸一（2007）『豊橋軍事史叢話（上巻）』三遠戦跡懇談会，71頁，豊川市（2007）『豊川市史（第三巻）』1023～1025頁等参照。
28 「4M37」の４は1944年を，MはMission（任務）を，37は通し番号を示す。つまり11月１日の4M1から数えて37回目ということになる。ＡとＢは，作戦ＡとＢが実施されたことを示す。
29 原田良次（1973）87～88頁。

れつ切り物音一つしない静かな夜だ。情報では侵入した敵機は今南方洋上に逃走中ださうで三十分許りで解除になつた。

来襲一機　　焼夷弾投下脱去

［解説］名古屋空襲を記録する会（1985）『名古屋空襲誌・資料編』（江口圭一氏寄贈資料）によれば，17日20時52分警戒，21時15分空襲警報発令，21時47分空襲，21時47分警戒警報解除となっている。来襲機はB29が１機で飛行ルートは渥美半島―名古屋―二川で，中島郡に焼夷弾を投下した。また，『三重の空襲時刻表』は，17日の21時５分警戒，21時25分空襲警報発令，21時48分空襲，21時57分警戒警報解除となっている。松戸基地では16日，17日ともいずれも「平穏の日」「敵の来ない日」であった。浜松市の旧豊西村の空襲記録は，一日ずれて２月16日21時22分に空襲警報発令，同21時37分には空襲警報解除，２分後の39分に警戒警報解除となっている。おそらく17日の間違いであろう。

（15）十二月十八日（月）

午前四時半、まだ明けやらぬ暁の空に又々警戒警報が鳴り出した。畜生又かと起きて身支度する間もなく更に空襲警報だ。どこからとなく退避信号が聞へてくる。婆さんと壕へもくつて三十分、思つたより早く解除になつた。

（16）午前十時半又しても警戒警報だ。組を一巡して準備完了を本部へ報告してくる。情報では少数の敵機が大阪方面と本県に侵入したらしいが、投弾もせずに退去したので空襲警報も出ずに十一時解除になつた。

（17）午后０時半又々警戒警報に続いて空襲警報だ。情報をきくと敵め幾手にも分れ静岡地方、伊勢湾、阪神などに来たらしい。間もなく退避信号が鳴る。空は薄雲で蔽はれ、その上を幾群となく編隊が通る。敵？味方？すると高射砲が鳴り出した。頭の上では邀撃戦が展開されたらしい。すさまじい機関銃の音だ。被弾を恐れて壕の中にじつと待機するより仕方がない。一寸静かになつたので出て見ると、東の山の上に火の手が上る。敵の焼夷弾による山火事だ。一時火柱まで見へたが程なく鎮火。西の空には飛行雲が縦横に棚曳いて居る。敵の航跡だろう。友軍機が一機二機大そらを旋回して居る。

次々の情報によるとけふは静岡にきた奴も京阪をねらつた奴も名古屋にうせた主力と落合て爆撃を繰返した後，南方洋上へ遁走した。三時になつてやうやう警報解除。名古屋はまだ盛んに燃えてゐるらしい。

来襲七十機　　内撃墜十七、撃破二十以上

（18）午後八時またしても警戒警報が鳴る。間もなく更に空襲警報だ。情報によれば少数の敵機が東海地区に侵入したらしい。老人の出砂張る幕でないと婆さんと壕へ。やがて敵機は南方洋上に去り、三十分許りで空襲警報が解除され、続いて警戒警報も解除された。

来襲一機　　偵察の後脱去

［解説］12月18日の目標は名古屋三菱航空機製作所であった。第２目標は指示されなかった。出撃した89機（４群団＝９戦隊）のうち１群団が500ポンド一般目的弾７発，500ポンド焼夷弾３発，他は500ポンド一般目的弾10発を搭載した。野戦命令書ではＡとＢの二ルートが指定された。Ａルート（５戦隊）は，12月13日のルートとほぼ同じであるが，遠州灘から上陸して挙母付近（35°23’Ｎ・138°44’Ｅ）をIPとして目標へ向かうもの，Ｂルート（４戦隊）は，潮岬から上陸，琵琶湖の首（35°07’

第10図：1944年12月18日の飛行ルート

第11図：1944年11月18日の爆撃写真

N・135° 57' E）[30] をIPとして目標へ向うことになっていた。左の図は，報告書の中の予報天気図に示されたAとB両飛行ルート。Aルートをとった部隊がIP挙母付近を通過したのが180355Z～180431Z（日本時間18日12時55分～13時31分），Bルートをとった部隊が琵琶湖の首を通過したのが180440Z～180535Z（13時44分～14時35分）であった[31]。

日本側はこの様子を「敵機は二縦隊となって航進し，一縦隊は伊勢湾方向に向かったが，他の一縦隊は御前崎，天竜川河口から本土に侵入し，その一部が富士山付近まで北上して東京侵入の態勢を示したのち急遽方向を西に変えた[32]」と記している。

再び報告書によれば，89機のうち63機が第１目標を爆撃，５機が最終目標（横須賀，浜松、新宮および２つの未確認の町）を爆撃した。21機は指定された目標を爆撃することに失敗した。爆撃時間は180400Z～180543Z（日本時間18日13時00分～14時43分）であった。また報告書は，爆撃の結果は良好なものであったと述べている。目標地域には125機の敵機がいたと推測され，合計103回の攻撃を受けた。また，対空砲火は一般的に不正確であった。米側は日本機５を破壊，11機を高い確率で破壊，12機に損害を与えたとしている。また，損害は損失機４機，行方不明者33人であった。第11図は，第１目標の三菱重工航空機製作所（大江工場）を爆撃中のもの。なお，報告書によれば，１機が浜松を爆撃したことになっているが，浜松市に空襲の記録は残っていない。

日誌では頭上で日本軍機による邀撃戦が展開された様子が述べられている。豊橋，浜松地域の防空は東部軍と中部軍（阪神・名古屋地区）の間にあった。この日も東部軍の第百飛行師団の部隊がこの浜松付近まで前進したが捕捉できなかった。中部軍の第十一飛行師団の部隊は名古屋に来襲した敵機を邀撃した。このため，12月19日，第百飛行師団の飛行第二百四十四戦隊（調布）主力を浜松へ前進させ，情報によって名古屋地区，東京地区のどちらかへ出撃することになった[33]。海軍は第三〇二航空隊（厚木）の戦力の一部を豊橋に進出させた。

また，日誌は「東の山の上に火の手が上る。敵の焼夷弾による山火事だ。一時火柱まで見へたが程なく鎮火」と記している。浜松市の記録によれば，同市に投下された爆弾は一般目的弾10発のため，これとは関係がないようである。この日，焼夷弾を搭載したのはAルートをとった一部の部隊だけである。それ以上のことは現在のところ不明である。

30　米軍は琵琶湖の最も狭くなっている辺り，現在の琵琶湖大橋辺りを琵琶湖の首（neck of Biwa Lake）と呼んで，たびたびIPとして利用した。

31　『作戦任務報告書』No.13.

32　戦史室（1968）423頁。

33　同上，424頁。また渡辺洋二『本土防空戦』朝日ソノラマ，昭和57年，232頁。

最後に，日誌は４回のＢ29の警報を伝えている。これを裏付ける信頼できる資料がない。ただ，『三重の空襲時刻表』だけは，①４時40分警戒，４時48分空襲警報発令，５時５分空襲，５時10分警戒警報解除，②10時７分警戒警報発令，11時11分同解除，③12時27分警報，12時42分空襲警報発令，15時９分空襲，15時22分警戒警報解除，④20時16分警戒，20時27分空襲警報発令，21時３分空襲，22時46分警戒警報解除としている。

(19) 十二月十九日（火）

午前二時警戒警報が寒夜の空になりひゞく。少数の敵機が東海地区に侵入したらしい情報に空襲警報の出るものと緊張してゐたが、そのことなく僅か十五分許りで解除になつた。

(20) 十二月二十日（水）

午前一時突如空襲警報だ。準備はいつでもOKだ。メリケンなど糞でも喰へとはね起きる。

聞けば何十分前警戒警報が出たのださうだが知らなんだ。暫くして情報でこちらへ向ふだろう敵機が方向を換へ静岡県東部へ侵入したといふ。帝都が案ぜられてならぬ。凡そ二十分許りで空襲警報が、続いて警戒警報が解除となる。馬鹿に寒い夜だつた。

(21) 午后十時半又々警戒警報が出る。情報では少数の敵機が静岡県下へ侵入したらしい。目下西進中とのことにいつでも来いと待ち構えたが遂に姿を見せず、三十分程で解除された。

帝都へ三機侵入　戦果不明

(22) 十二月二十一日（木）

午前四時又々警戒警報が鳴る。獣また来たかと身構へる。もう誰も馴れ切つてあわてるものもない。ママよ空襲までとお茶を沸してゆつくり呑む。情報を聞くと東海地方へ侵入した敵は愛知県の南方を遠州灘に遁走中だと。かくて三十分後に警戒警報は解除された。

其後聞けば敵は名古屋を目指し渥美半島の上空を通過したが名古屋を発見出来ずウロウロした挙句南方洋上に退去したものらしいといふ。

来襲二機　　被害絶無

ここで一寸空襲時の姿を書きとめて置かう。

已に空襲も度び重なればお互の胆玉も図太くなり、女子供までが落付いたものだ。それも成る様に成れといふ棄鉢気分でなく、何処迄も郷土を守りぬくといふ逞しい度胸だ。従て夜など誰でも防空服装のまゝのゴロ寝でいつでも飛び出すといふ心構へに変りはない。

一度び警戒警報が出ると屋内を取方付、火気を消し、燈火を隠蔽すると共に重要品を退避壕へ投げ込む。水と砂とは平素から多分に用意してある。鳶口、大叩き、スコップ、されはバケツに濡れ蓆と思い思いの準備にぬかりはない。空襲警報となると先づ雨戸を開けて爆風に備へ、鉄兜や防空頭巾に足拵もものものしく、いつでも来れと待機する。敵機が近づくと退避信号の鐘が鳴る。それを聞くと皆一時壕へもどるが決して逃げたり隠れたりするんじゃない。敵が焼夷弾を落せばすぐ飛び出して叩き潰す。爆弾なら負傷者の救出や手当にぬかりはない。

隣保班長はこの間組内を巡つて準備を見届け、その完了を町の防衛本部に報告する（後この報告は廃止となり、事故ありたるときのみ報告となる）。空襲となると敵機の監視に当り、刻々の情勢を組内に伝達する班長不在の時は組長がやる。こうして組は一心一体となり災害を最小限度に喰止めやうとする意欲に燃えて居る。自身の危険など遠の昔に忘れてそんなこと考へる暇もない。

［解説］12月19日～21日までまとめて考察する。原田良次（1972）は，19日「終日情報もなく平穏の一日」，20日「〇〇四〇警報，Ｂ29単機侵入の様子・・・一〇五〇B29偵察一機来襲。また二一五〇警報あり。いずれも出動せず。」，21日「〇二一〇警戒警報，B29一機。投弾せり。高射砲とどろき照空隊の光芒のみ空に輝いた。」20日は世田谷区，21日は江戸川区に投弾，いずれも被害があったと記している。

『三重県の空襲時刻表』によれば，19日２時11分警戒警報発令，同22分解除，20日０時36分警戒，０時55分空襲警報発令，１時20分空襲，同33分警戒警報解除，さらに22時26分警戒警報発令，同59分警戒警報解除，21日は

３時55分警戒警報発令，４時37分警戒警報解除となっている。

日誌は，空襲時の様子について記している。愛知県警察部「警防団業務所」（昭和15年４月）によれば，警報を警戒警報，警戒警報解除，空襲警報，空襲警報解除の四種に区別し，空襲警報と空襲警報解除はサイレン，電灯点滅，警鐘，煙火のいずれか，警戒警報と警戒警報解除は口頭で伝達されることになっていた[34]。しかしその後，信号方法は変化したようである。地域によっても異なっていたとも思われるが，日誌では「警戒警報が寒夜の空になりひゞく」といった表現をしている。後の記述からも，豊橋では警戒警報，空襲警報ともにサイレンで知らせていたことがわかる。また,「敵が近づくと退避信号の鐘が鳴る」とあるように，敵機が近づくと隣保班内に防空壕への退避合図を鐘で知らせていたことも読み取れる。また，警戒警報発令後，空襲警報発令後にそれぞれやるべきことをやり，加えて「思い思いの準備」を行なった。

(23) 十二月二十二日（金）

午後〇時半水谷老神職と御由緒のことで話し合つて居ると、突如警戒警報だ。何だか大規模に獣めがやつて来たやうな予感がする。水谷氏が急いで帰られるのを送つて門に出ると空襲警報だ。

情報によると浜名湖地方へ侵入した敵機が西進中とのことに東の空を見つめて居ると、来たわ来たわ十機編隊の敵が西北に向つて高々度でゆき居る。少し離れてまた五機編隊の奴がその踵を追つて居る。波状攻撃をやるつもりと見へる。憎らしいとも何ともいゝようがない。

退避信号が鳴り出したので婆さんと壕にもくると頭上をよぎる編隊の爆音が地響きする通過を待つて出て見ると、鮮やかな飛行雲を曳いて敵の六機が西進中だ。何れも名古屋に向ふのだろう。予感は正に的中だ。

奴等途中で焼夷弾を落したのか石巻山の西麓遠くに黒烟が上る。多米峠の向ふも盛んに燃えてゐるらしい。暫くすると北方上空にまた敵機だ。四機編隊で東西に向つてゐる。それより距れて敵一機が白煙を長々と曳いてよろめくやうに遁走する。追跡する見方戦闘機の翼が時々見る。皆出て見て思はず快哉を叫ぶ。

次の瞬間またしても上空に敵機だ。味方機がこれを邀撃して居ると見へ機関銃の音がバリバリと壕まで聞へてくる。一寸静かになつたので出て見るとあちらに一隊こちらに一隊の敵がマゴマゴしてけつかる。やがて六機編隊の敵が南をさして逃げてゆくのに一機だけが西に向つて居る。その遥か上空を無数の敵機が一群となつて南をさして逃げてゆく。少くとも三十機位は居ただろう。

間もなく西に向つた一機も大きく旋回して南へ逃げたしもう大丈夫と思ふまもなく紀淡海峡から侵入した敵が岐阜・名古屋を経てまたやつて来た。何か慌てふためいた様子で投弾もせずに逃げてゆく。三時二十分頃逃げ後れた敵の七機編隊が頭上を南に遁走する様がハッキリ見へる。かくて三時半空襲警報が十分後更に警戒警報が解除されたのでほつとする。

何でも敵は名古屋をめざし集中攻撃をやつたらしい。大事な時だ。損害を最小限度に喰止めて欲しい。そしてけふもまた爆撃もうけず無事だつたので警報解除と共に神前にお礼申し上げた。

近くの内藤君の前へ機関銃の薬莢（十三ミリ機関銃）が落ちて来た。家人の拾つたのを私も見たが敵のものに相違なく可なり大きな奴だ。すぐ町内会長に届出る。組の園原君の屋根にも何か落ちた物音に皆なで捜したが、つい発見出来なかつた。真上の空中戦で何か落ちて来たのだろう。兎に角今日が今迄の内では一番烈しかつた。

来襲約百機撃墜二十機、撃破二十機以上

［解説］12月22日には第１目標を名古屋三菱重工発動機製作所として78機が出撃した。第２目標は明記されなかった。各機は500ポンド焼夷弾（M76）11発を搭載した。この日は，

34　名古屋空襲を記録する会（1987）154～157頁。

第12図：1944年12月22日の飛行ルート

初めての焼夷弾のみによる高高度爆撃が予定された。飛行ルートは12月18日の作戦と同じＡとＢの２ルートが用意された。報告書によれば，Ａルートを飛行した一部の部隊は指定されたルートからはずれ，西風を避けるために34°30’Ｎ・137°00’Ｅ（志摩大王崎付近）に上陸した。また別の一部の部隊はIP上空へ向かわず直接目標へ向った。Ｂルートを飛行した一部の部隊は上陸後まもなくIPの利用を断念，別の一部の部隊は指示されたルートより西に上陸，琵琶湖北岸をIPとして目標に向った。復路はＡＢ両ルートともに三河湾，渥美半島を経て洋上へ抜けた。日本の戦闘機による攻撃は，約175機により508回，目標上空の対空砲火は中程度ないし激烈，不正確ないし正確であった[35]。

日誌は「壕にもくると頭上をよぎる編隊の爆音が地響きする」「またしても上空に敵機だ。味方機がこれを邀撃して居ると見へ機関銃の音がバリバリと壕まで聞へてくる」などの記述が見える。ここで，豊橋上空を通過する可能性が強いＡルート（遠州灘―挙母［IP］―目標―三河湾）を飛行した部隊に対する上陸地点からIPまでの日本機の攻撃と対空砲火の様子を報告書によって辿ってみよう。上陸地点からIPまでに，高度29000～32000フィート（約8839～9753メートル）でアービング（月光）から１回，トージョー（鐘馗）から22回，トニー（飛燕）から４回，ニック（屠龍）から３回，計30回の攻撃を受けた。Ｂコースも含めた目標から離岸地点まででは，高度28000～32000フィートで同上のような日本機から合計147回の攻撃を受けた。対空砲火については，先導部隊は浜松西の飛行場近くに位置すると思われる砲台の重砲による弾幕射撃の間を飛行したが，弾幕射撃型の対空砲火は２，３秒しかつづかなかった[36]。

また，雲のため第１目標をレーダー爆撃したのは48機であった。３機が最終目標として豊橋，浜松，室戸岬を爆撃した。27機は機械の故障，人的ミスなどで指定された目標を爆撃することに失敗した。浜松と豊橋にそれぞれ焼夷弾11発（2.75トン）が投下されたことになっているが，両市には空襲の記録は残っていない。日誌は「奴等途中で焼夷弾を落したのか石巻山の西麓遠くに黒烟が上る。多米峠の向ふも盛んに燃えてゐるらしい」と記している。この火災については現在のところ不明である。旧豊西町の空襲記録は，12時29分警戒，12時35分空襲警報発令，警戒警報，空襲警報解除ほぼ同時で15時35分。記事欄には「敵機静岡県に入る。来襲時間三時間の長きに渡る。敵機来数五，60機，静岡・名古屋地区爆撃」と記すにとどまっている。

米軍側は，この作戦で２機のB29を失った。うち１機は目標上空の対空砲火によるものであった。そして行方不明17人，重軽傷各１人を出したとしている。また作戦部隊は敵機９機破壊，17機を高い確率で破壊，15機に損害を与えたと申告した[37]。

（以下，次号）

受稿：2011年１月10日
受理：2012年２月１日

35 「作戦任務報告書」No.14.
36 「作戦任務報告書」No.14. 米軍側は日本機に対して独自のニックネームをつけていた。
37 「作戦任務報告書」No.14.